

# 「殺さねばならぬ『共匪』」の記憶と満洲国軍出身者 ——金得中『「アカ」の誕生』を読む——

飯倉 江里衣

## 目次

はじめに

1. 本書の構成と内容

2. 評価とその限界

3. 「殺さねばならぬ『共匪』」と満洲国軍出身者

——植民地主義の継続の観点から

むすびにかえて

## はじめに

本書は、大韓民国（以下、韓国）成立後の1948年10月19日に起きた麗水・順天事件（以下、麗順事件）を中心にして、韓国政府樹立初期の反共体制の形成過程について論じた労作である。麗順事件とは、1948年4月3日に南朝鮮での単独選挙に反対して立ち上がった済州島での民衆蜂起への鎮圧命令を受け、麗水にて出発の待機中であった韓国軍第14連隊の下士官らが独自の反乱を起こし、軍内部の蜂起が次第に麗水・順天地域での広範囲な民衆蜂起へと発展していった事件のことである。本書における『「アカ」の誕生』とは、韓国社会において、思想としての共産主義や共産主義者に対する概念が、麗順事件を経て「殺さねばならぬ『アカ』」に変わったという意味である。

著者の<sup>キムドクチュン</sup>김득중（金得中）は<sup>ソンギョングン</sup>성균관大学卒業後、同大学大学院で韓国近現代史を専攻し、修士論文「制憲国会の構成過程と性格」（1994）を執筆し、その後「麗順事件と李承晩反共体制の構築」（2004）で文学博士号を取得した。現在、国史編纂委員会・編史研究社に在職中で、韓国ジェノサイド研究会・運営委員長を務めている。近年では、朝鮮戦争前後に発生した民間人虐殺、第一共和国の法律と司法体制などに関心を持ちながら研究を進めている。本書は、著者が2004年に提出した博士学位論文を基に加筆し出版したものであり、近年公開されるようになった米国の資料や韓国で刊行された口述記録集などを活用しながら、朝鮮戦争直後に行われた民間人虐殺の前触れとしての、

麗順事件における李承晩政権による虐殺の事実を明らかにすることに成功している。

まず、ここでは本書のキーワードである「アカ」について、韓国において使われるその言葉の意味を簡単に説明しよう。本書における「アカ」は、原語の朝鮮語では「빨갱이」（発音：パルゲンイ）である。「빨갱이」は日本語の共産主義や共産主義者に対する蔑称の「アカ」、欧米で使われる「commie」とも異なる。韓国における「빨갱이」とは、「良民」を虐殺する殺人鬼や非人間、悪魔であり、道徳的・倫理的に人間以下であるため軽蔑し殺しても構わない、同じ空の下で生きることのできない存在である（김득중 2009:560、以下、本書については頁数のみ）。本稿では、このように概念化された「アカ」を日本語の「アカ」とは区別し「殺さねばならぬ『アカ』」とよぶが、著者は本書において、この「殺さねばならぬ『アカ』」は麗順事件を通して誕生したと主張している。麗順事件以後は「アカ」を殺すこと自体が愛国的で民族のためであり、民族主義体制を守る行為とみなされた（46-47）。

韓国の正史において麗順事件は、南の共産主義者独自の反乱ではなく、朝鮮民主主義人民共和国（以下、「북한（北韓）」の訳出と統一し、北朝鮮と記す）の共産主義者と連携した韓国政府を打倒するための策略として理解されてきた。このような正史が支配する言説空間では、そもそも「なぜこの事件が発生したのか」という原因についての基本的な問いが欠落し、「誰がこの反乱を起こしたのか」「彼らは誰の命令に従ったのか」という問いから入ることになる。これに対して、反乱は左派政党と左派政治勢力が主導したもので、彼らはそもそも体制を転覆しようとする目的を持っていた、という説明を付与することで、武力でこれを一気に鎮圧したことがどれだけ妥当で誇らしいことなのかを証明してしまう、という論理構造ができあがる（38-39）。

本書は、このように麗順事件が、これまで一方的な解釈によってのみ理解され、韓国の反共体制の圧力のために、事件の鎮圧過程における民間人虐殺の事実について語ることをできなかったという問題意識に端を発している。また、「殺さねばならぬ『アカ』」がどのように誕生したのかを、政府による麗順事件の処理過程の分析を通して明らかにしようと試み、麗順事件を韓国の反共国家形成の決定的な契機として位置づけている。

麗順事件の研究は、これまで樋口雄一（1967・1976）や<sup>フン</sup>황남준（1987・1987）、メリル John Merrill（1989）、カミングス Bruce Cumings（1990）<sup>1</sup>などによって進められてきた。樋口雄一は、資料がほとんど存在しない時代状況下にあったにもかかわらず、麗順事件の蜂起に広範な市民と学生が参加した点に注目し、民衆のすさまじい抵抗を、いかに李承晩政府が殺戮を含む暴力によって否定し、支配しようとしたのかを描き出した。また、황남준は、麗順事件が起こったのは、事件当時の社会・経済的条件および政治的状况と、植民地解放から韓国の建国に至るまでの全羅南道地域の地方政治過程において生成された諸条件とが結合し爆発した結果だったことを論じた。それに対しメリルは、麗順事件の展開過程だけでなく事件後に焦点を当て、事件後に政府が行った麗水・順天地域に対する弾圧や、肅軍と肅軍の結果として引き起こされたさらなる蜂起、智異山<sup>チイサン</sup>へ逃げた蜂起軍部隊の動き、事件が済州島に与えた影響、北朝鮮の事件に対する反応などについて明らかにしている。一方カミングスは、麗順事件の重要要素や特殊性として、蜂起以前に韓国軍が警察組織と対立関係にあったことや、軍内部に多数の左翼や共産主義者を抱えていたことを強調し、蜂起が自然発生的であり、計画的なものでなかったことを示した。このように麗順事件について明らかにされてきた点は少なくないが、管見では、これらの研究では、麗順事件における蜂起が一般大衆によって担われたことと民間人虐殺が行われたこととの関連性や、事件が李承晩政府の反共主義体制の構築に与えた影響については、いまだ十分に論じられてこなか

ったと考えている。そして、その欠落を見事に補っているのが、本書である。端的に言って、蜂起が一般大衆によって担われたことが、軍・警察による民間人協力者の搜索・虐殺という事態に結びつき、また李承晩政権の反共国家体制の形成に大きな影響を与えたということは、本書を通じて切り開かれた視点であった。

本稿では、まず第1節で各章の内容を要約しながら、麗順事件の処理過程でどのように韓国の反共体制がつくられていったのかを再整理しよう。次に第2節では、本書への評価と疑問を挙げておきたい。第3節ではさらに評者自身の研究関心から、本書で指摘されたことへの補足として、麗順事件の鎮圧作戦において「活躍」した韓国軍の満洲国軍出身者について、植民地主義の継続という観点から考察してみたい。

## 1. 本書の構成と内容

本書の構成は次のとおりである。

### 序論

1. なぜ麗順事件を研究しなければならないか
2. 「反乱」と「抗争」、そして「事件」
3. 研究史検討—「軍」から「大衆」へ—
4. 研究の構成と資料

### 第1部 麗順事件の勃発と大衆蜂起への転化

#### 第1章 第14連隊軍人蜂起

1. 麗水第14連隊の蜂起
2. 第14連隊蜂起の背景と原因

#### 第2章 大衆蜂起への転化

1. 全南東部地域への蜂起拡散
2. 人民委員会の活動
3. 解放前後全南東部地域の社会運動

### 第2部 鎮圧と虐殺

#### 第3章 政府の危機認識と対応

1. 金九勢力に対する牽制
2. 共産党陰謀としての麗順事件

#### 第4章 国軍の焦土化鎮圧作戦

1. 政府軍の鎮圧作戦
2. 米軍の介入

#### 第5章 民間人協力者搜索と虐殺

1. 協力者搜索と虐殺
2. 共産主義者としての命名

<sup>1</sup> Bruce Cumings (1990) *The Origin of Korean War Vol.2*, Princeton Univ.Press. 本稿では、ブルース・カミングス著、鄭敬模・林哲・山岡由美訳（2012）を参照した。

ーファンドウヨン・パクチャンギル  
・ソンウギの場合

### 3. 即決処分と軍法会議処刑

### 4. 破壊と再建の二重奏

## 第3部 反共国家「大韓民国」の建設

### 第6章 「アカ」の創出

1. メディアの事件再現と非人間化談論
2. 文化人・宗教社会団体の「アカ」談論
3. 「女学生部隊」の神話—誘惑する共産主義

### 第7章 李承晩反共体制の構築

1. 国家組織の再整備
2. 反共体制の法制整備
3. 社会の再組織化—日常的統制体制の構築
4. 「アカの創出」と反共国民の誕生
5. 反共テキストの再生産と大韓民国建国の神話

### 結論

本書は全3部、全7章で構成されている。第1部「麗順事件の勃発と大衆蜂起への転化」では、蜂起軍と大衆による麗順事件の蜂起が主体別に論じられ、第2部「鎮圧と虐殺」では麗順事件に対する李承晩政府と政府軍による対応の分析、第3部「反共国家『大韓民国』の建設」では、共産主義者に対するイメージの構築と、構築されたイメージに基づく反共体制の成立過程の分析がなされている。

まず序章では、問題意識を提示し、これまでの正史の中で隠蔽され、抜け落ちてきた麗順事件の事実関係について明らかにすることを第一の目的として掲げている。そのうえで、「国家建設過程で暴力が使用される政治的過程と暴力それ自体の性格、暴力を通して構築された新しい秩序の性格を複合的に把握すること」の重要性を強調し、「麗順事件後の鎮圧過程で『アカ』というイメージがつくられる過程と、赤裸々な国家暴力を通して反共体制が樹立される国家建設と国民形成過程に注目する」という、本書の問題設定を提示した(45)。

第1章「第14連隊軍人蜂起」では、麗水第14連隊蜂起の過程について、特に蜂起の偶発的側面に焦点を当てながら論じている。著者は、第14連隊内の下士官らが蜂起を起こした要因として、済州島への派兵命令と肅軍に対する恐怖を挙げ、蜂起は具体的な計画や目標に従って成し遂げられ

たものでなかったと論じる。第14連隊には単独選挙・単独政府樹立反対運動の先頭に立ち、身の上の危険を感じたため軍に入り身を隠した青年たちが含まれていたことや、彼らが日本の植民地期から警察に対して敵対感情を募らせていたことが指摘されている。また、麗順事件勃発以前には、韓国軍や米臨時軍事顧問団ですら、反政府的な動きを、必ずしも共産主義者によるものと認識していたわけではなかったという。

第2章「大衆蜂起への転化」では、麗水で起こった第14連隊の蜂起が全羅南道東部地域に大衆蜂起として拡散した過程を論じる。蜂起勢力による警察や右派の虐殺が、個人的な報復や私的感情によって行われることはあったが、人民委員会によって行われることはあったが、人民委員会の「人民裁判」処刑が行われたという住民の噂や、その噂をもとにした新聞報道によって、誇大に流布されたという事情が論証されている。また、蜂起に加わった麗水・順天地域の左翼勢力の多くは、植民地期から読書会や農業・労働組合を通して抵抗運動を行い、植民地解放後には建国準備委員会や人民委員会において主導的に活動し、社会運動を率いていた知識人であったという。しかし、彼らは解放後に支配力を行使することはできず、それに代わって勢いを増したのは、植民地期に社会運動経験を持たない、解放青年同盟や治安隊の中の青年・学生層であったことも重視されている。

第3章「政府の危機認識と対応」では、李承晩政府とそのほかの政治勢力が麗順事件をどのように認識し、どう対応しようとしたかが論じられている。著者は、李承晩政府が事件の真相を把握して收拾するのではなく、むしろこの事件を、統一政府樹立を目指し南北協商に参加していた金九勢力などを弾圧するために利用したことに注目している。政府の閣僚たちは、新生政府の根幹でもある軍内部から反乱が起きたという政府の統治力の傷となる事実を隠蔽するため、虚偽の報告を行い政敵の圧殺を図った。他方、北朝鮮の麗順事件についての認識も、アイロニカルにも「蜂起を起こした人々は北の政権を支持した」という李承晩政権の認識と似通っており、麗順事件が北朝鮮の体制の優越性を立証する事例とされてしまった点を掘り下げている。

第4章「国軍の焦土化鎮圧作戦」は、蜂起軍の

鎮圧過程における韓国軍と米臨時軍事顧問団との関係を分析し、米軍の介入について明らかにしている。この作戦過程において、反乱鎮圧や共産主義ゲリラ掃討などの戦術を教育された満洲国軍出身の指揮官たちが躍進し、他方で、植民期に「討伐」経歴がなく鎮圧作戦に不相当と予想された人物や、麗水蜂起に対する状況判断を留保し蜂起軍に温情な態度を持っていた人物は、一線で活動することができなかったという。韓国軍首脳部や米臨時軍事顧問団員にとって、麗順事件鎮圧の経験は、軍の歴史上初めての陸・海・空軍の合同作戦であったため、一つのよい訓練として受け止められたのであり、そのために、そもそも虐殺などを含む民間人が被った苦痛に注目する者は、ほとんどいなかったのである。

第5章「民間人協力者搜索と虐殺」では、鎮圧軍が麗水・順天を占領した後の協力者搜索と、軍法会議などの過程で発生した民間人虐殺について論じている。軍・警察は鎮圧作戦中、逃亡や反抗の危険があるとみなして裁判手続きを経ず、拘禁していた人々を相当数即決処分、つまり虐殺していた。それに対して著者は、地域の右翼勢力との軋轢や警察との衝突、虚偽の噂のために捕まったり、即決処刑を受けた人々の事例分析を重ねている。さらに、一般市民を蜂起軍と同一視し、彼らの人命と財産を奪う焦土化作戦を行った、破壊の当事者であった政府が、鎮圧が一段落するや、反乱地域への救護事業を実施し復興計画を推進して、復興の当事者に変貌したという事情についても明らかにしている。

第6章「『アカ』の創出」は、麗順事件を経て李承晩政権がどのように「共産主義者＝他者」という規定を確立したのか、そのことに関わって、同時代の言論人、文化人、宗教団体などによるアカ表象がどのようなものであったのかについての分析を行っている。言論人については、強い責任感を要求されるはずの記者が、誤報や事実の誇張を行っていたこと、そもそも彼らには民衆に対する関心が欠如していたことなどを仮借なく指摘し、彼らが事実追跡を怠った無責任さは、蜂起軍を人間とみなさなかった鎮圧軍の視座とほとんど変わらないと厳しく批判している。政府によって現地に派遣された文化人も、創作を通して「アカ」の

イメージと「反共民族」を形成する役割を果たした。そこでは、スカートの下から拳銃を取り出す「武装した女学生」という、極悪の共産主義像の「神話」がつくりだされたのだった。

第7章「李承晩反共体制の構築」では、麗順事件をきっかけに軍隊が反共化しつつ肥大化していたこと、そして、軍と警察による虐殺を合法化する「戒厳」、国家保安法などの法制整備が進んだということを論じている。公報処の宣伝や「国民運動」を通した「反共主義」拡散事業、全国民を監視する「外来留宿者申告制」も広がり、政府樹立初期の国民形成が、(1) 圧倒的な物理力を動員した国家暴力、(2) 法制的暴力、(3) 社会、文化的な側面で進行する日常的暮らしに対する統制、によって成り立っていたと指摘している。加えて、著者は、『国史』『韓国近・現代史』の教科書に麗順事件などがどのように叙述されてきたかも歴史的に検討し、依然としてそれらが反共テキストの役割を果たしていることを証明した。

最後に結論では、麗順事件の展開過程を整理し、韓国現代史で同事件が持つ意味と事件が韓国社会に残した課題について、次の6点を挙げて論じている。(1) 李承晩政権は麗順事件を「共産主義者の反乱」として規定した。(2) 事件によって、「殺人魔」であり、殲滅しなければならない他者である「アカ」という規定が誕生した。(3) 同時に、韓国国民は「反共国民」でなければならないと規定された。(4) そこに、国家暴力と大衆抑圧を通して反共国民が構築された。(5) 麗順事件を契機に韓国社会は反共国家として鑄造された。(6) 韓国社会に内在する反共論理は、今日においても依然として再生産され続けている。このように、麗順事件は現在進行形であり、韓国社会にはいまだに反共主義の遺産が潜んでおり、それは韓国社会が今後克服しなければならない深刻な課題であるという。

以上のように本書は、麗順事件の事実の掘り起しを通して、国家建設過程で暴力が使用された実際の政治過程と、暴力それ自体の性格、こうした暴力を通して構築された新しい秩序の性格を複合的に見ていくことに成功しており、麗順事件を契機にして韓国政府樹立初期に反共体制が形成されていく動態を生き活きと描き出してみせている。

## 2. 評価とその限界

まず、本書の意義を、韓国現代史における民衆運動史、民間人虐殺研究、韓国の反共国家体制形成史への貢献という、三つの面から見てみたい。

第一の意義は、民衆運動史への貢献である。本書は、一般大衆による抗争として蜂起が拡散したと描き、「北朝鮮共産主義者と結びついた軍内部の共産主義者による計画的な政府転覆陰謀」という正史による事件像を覆した。言い換えれば、麗順事件はこれまで軍内部でのクーデターという側面が強調されがちであったため、民衆運動史としては本格的な研究対象にならなかったのである。しかし、本書は、麗順事件の重要な主体として、事件に参加した大衆や地域の左翼勢力に焦点を当て、軍人「蜂起」から大衆の「抗争」に転化した側面や、蜂起に参加した大衆の活動の十分な分析を行い、事件を大衆抗争として描き出した。それだけではない。蜂起軍によって行われた虐殺についても批判的に論じており、左翼勢力による虐殺は、鎮圧軍や右翼が行ったそれとははたしかに規模の面では相当な開きがあるものの、方法と手続きの面では、鎮圧軍が麗順市民を対象に行った大量民間人虐殺と大きな違いはなかったという衡平で重要な指摘も行っている。つまり、この指摘は、大衆抗争としての麗順事件が持った限界性を暗示しているのである。本書によって麗順事件は、民衆運動史上、韓国建国後の初めての大衆抗争として明確に位置づけられつつ、韓国の正当性を大きく揺るがし、李承晩政権に大きな脅威を与えた出来事であったことも明らかになった。

第二の意義は、民間人虐殺研究への貢献である。事件は、建国わずか2ヶ月後に国軍内部で反乱が起きた。さらにそれが大衆による広範囲な蜂起へと拡散して李承晩新政権の正当性を揺らがした。そのような事態を隠蔽するために、政府や軍が徹底的な抑圧・弾圧を行ったことが、明らかになったのである。鎮圧軍と警察によって行われた民間人虐殺は、地域に対する報復として行われたり、警察や右翼関係者を襲撃されたことに対する個人的な恨みによってさらに残忍に行われたりした一面もあった。そしてそのような虐殺が、事後的に

国家によって合法化されたのであった。つまり、鎮圧軍・警察は共産主義とは何ら関係のない人々、すなわち「良民」までも殺したが、殺された人々は殺された後に「アカ」にされた(41)。著者は、そのような麗順事件の民間人虐殺の事実についてこれまで人々に声を上げさせなかった反共体制の圧力を、事件後の反共体制の形成過程についての分析を通じて解明することに成功している。先行研究において、特に米軍の資料に偏って行われてきた分析の中では、事件に参加した一般の人々に対する関心は薄く、麗順事件における民間人虐殺被害についてもほとんど論じられてこなかった(Cummings (1990)、Merrill (1989)) ことからすれば、重要な一歩である。

第三の意義は、韓国の反共国家体制形成史への貢献である。この点は本書における最も大きな成果として認めることができる。その中で「殺さねばならぬ『アカ』」がどのように誕生したのかが明らかにされる論証過程は白眉である。李承晩政権は麗順事件の処理過程において、「戒厳」によって鎮圧軍の暴力を合理化し、検察と警察の暴力を「合法化」するために、国会では各条文についての綿密な検討なしに国家保安法を通過させている。さらに政府は敵（共産主義者）に反対しない者までも敵とみなし、教員や軍隊内左派の粛清、保導聯盟員に対する予備検束と処刑を執行した。学徒護国団や公報処、「国民運動」を通じた反共教育・反共宣伝が展開されることで、反共体制の強化が図られたのである。これらを丁寧に解明することによって、本書は、鎮圧軍・警察、政府による麗順事件に対する危機対応を支えていたのが、「殺さねばならぬ『アカ』」の誕生だったという。その点で、麗順事件こそが韓国の反共国家体制形成の起源であり、契機であったことを初めて証明した。

同時に以下のような疑問も残る。

第一に、蜂起が計画的かつ組織的に行われたわけではなかったという論証の一つとされている、人民裁判は行われなかったという主張の根拠が弱いという点である。第2章でそもそも著者は、麗水や順天で人民裁判が行われなかったことの論証を試みているが、人民裁判の存在を多くの人が証言している事実を、実際には人民裁判を直接見たという証言は存在しないこと、処刑は人民裁判の

形をとらなかったという証言があることによって覆そうとした。しかし「なかった」ことを論証することや、同じ「証言」という材料の間に信憑性の優劣をつけて用いる手際には、説得力を欠く面がある。

二つ目に、「反共」という規定の仕方に関しても問題が残る。というのも、著者は特定の組織や人物に対して、「反共組織」「反共主義傾向」「反共主義的」という言葉づかいを行っている。警察を「親日勢力が強力に布陣した反共組織」(113)であると述べたり、『『親日派』の温床であった警察組織に越南した反共主義傾向の人物も大挙入り、警察は反共主義を掲げた『民族の先駆』であり『殉教者』になった」と指摘したりする(114)。ほかに、「一心不乱な反共組織としての警察と、互いに違う傾向が混在している朝鮮警備隊との違いこそ軍警衝突の背景だった」(116)、「白善燁は(中略)極度の反共主義的態度を持っていた」(123)、「強力な反共主義路線を持っていた満洲国軍出身指揮官たち」(244)などという箇所がある。しかし、「反共」と名指したそれぞれの組織や人物についての分析を抜きにして、一様に「反共」と規定しまってよいのだろうかというのは、本書の議論に深く打たれつつも、最後まで残った評者の違和感であった。

### 3. 「殺さねばならぬ『アカ』」と満洲国軍出身者 —植民地主義の継続の観点から—

本書の中で特に評者の関心を惹いたのは、鎮圧作戦における満洲国軍出身者たちの「活躍」であった。著者は第4章で、麗水の鎮圧作戦を主導した満洲国軍出身者について、彼らが「満洲国」(以下、満洲国)で身に付けたという臨陣撃殺権(軍と警察の裁量によって敵対する勢力を即決処分できる権限)を忘れず、これを実施していたと示唆する(307)。また、「満洲国軍出身者は正規軍訓練より反乱鎮圧や共産主義ゲリラ掃討などの戦術を主に教育され、麗順鎮圧に適格」であり、「日本人顧問団制度があった満洲国軍での経験は、米臨時軍事顧問団制度にも上手く適応する下地に」になったという(239)。人事権を掌握した米軍も、満洲国軍出身指揮官たちの「活躍」が、陸軍が蜂起軍を鎮圧できるのかという懸念を払拭したため、

韓国軍のなかでの指揮体制の変化を黙認していた(240、244)。

ここでいまひとつ疑問として残るのは、軍がどのように鎮圧作戦を実行していったのか、という問題点である。そこで本節では、評者自身の研究関心から、本書で指摘されたことへの補足として、事件の鎮圧作戦で「活躍」した満洲国軍出身者について、(1) 満洲国軍出身者にとって「殺さねばならぬ『アカ』」は植民地期の「殺さねばならぬ『共匪』」の反復であったこと、鎮圧作戦において、(2) 満洲国軍出身者同士による技術面での信頼関係があったこと、(3) 「満洲」(以下、満洲)で学んだ中国語という共通言語が活用されたこと、の三点を見ていきたい。

鎮圧作戦で韓国軍指揮官として活躍した金白一<sup>2</sup>、白善燁、宋錫夏などは、満洲国軍内に1938年<sup>2</sup>に創設された間島特設隊での活動経験がある(240)。満洲国軍は1932年の満洲国の建国と共に日本軍(関東軍)によって創設され、関東軍による指示の下、日本の軍事戦略に合わせて活動を行った。当初は張学良率いる東北軍閥軍の兵力の一部を取り込むことによって成立し、後には「多民族国家」を標榜した満洲国の軍隊として、日本人、朝鮮人、モンゴル人なども入隊したが、1932年の創設から1945年の武装解除までは、大部分は満洲族・漢族が中心であった。満洲国軍内には、各民族の特性を生かした特殊部隊として、1937年には浅野部隊(白系露人部隊)、1939年に回教部隊、オロチョン工作隊(オロチョン族)、1941年には磯野部隊(後、五十三部隊、蒙古人部隊)が創設され、間島特設隊は朝鮮人部隊として1938年12月につくられた(満洲国軍刊行委員会1970:193)。間島特設隊は第1期から第7期まで、間島省(現在の吉林省延辺朝鮮族自治州)に居住する18歳以上20歳未満の「国語」を解する朝鮮人から、約690名の一般隊員の募集を行った<sup>3</sup>。同部隊には日本人指揮官も常駐したが、創設要員や指揮官として朝鮮人が活躍した。上記の金白一、白善燁、宋錫夏のよ

<sup>2</sup> 著者は신주백(2002:111)を参照し、1939年に創設されたと述べているが、間島特設隊が創設されたのは正しくは、1938年12月である。

<sup>3</sup> 総数については議論があり、多くの研究の中では690名という数字で一致しているが、それ以上であったという見解があらゆる研究において共通する点である。

うな韓国軍の指揮官たちは、一般隊員としてではなく、満洲国軍の将校を養成する中央陸軍訓練処や陸軍軍官学校を卒業した後に、将校として同部隊に派遣された。

間島特設隊の活動は、(1) 創設時(1938年12月)から1943年末まで間島省一帯で東北抗日連軍の「討伐」を行った時期と、(2) 1944年始めから1945年8月まで熱河省と河北省一帯で八路軍などの「討伐」を行った時期の二つに分けることができる。同部隊の活動の一貫した目的は「共匪討伐」であり、活動内容は「匪民分離」工作であった。「匪民分離」とは、日本側が「匪族」や「思想匪」などと呼んでいた勢力と民衆とを引き離すという意味である。

中国共産党の指導下で創設された東北抗日連軍および八路軍は、小部隊による抗日パルチザン闘争を行った。パルチザン闘争は、通常反政府闘争や反植民地主義闘争として、人員、食糧、衣服、武器などの供給を地域住民に依存しながら行う政治闘争のことであるが、日本側は抗日を掲げて政治闘争を行うこの中国共産党傘下の軍隊を「共産匪」「共匪」などと呼んだ<sup>4</sup>。間島特設隊は創設時から1943年末まで、住民の約8割を朝鮮人農民が占める間島省一帯で活動する、東北抗日連軍第一路軍の「討伐」にあたったが、この第一路軍の隊員の過半数、幹部の4分の1は朝鮮人であった。それに対し、1944年始めから1945年8月まで熱河省と河北省一帯で「討伐」した八路軍は、隊員のほとんどが中国人であり、当該地域住民も中国人であった。それぞれの地域において、「共匪」と住民との密接な関係をいかに断ち切るかが、間島特設隊の「討伐」作戦上の最も重要な任務であった。

この「匪民分離」工作のために間島特設隊が果たした役割として大きいのが、情報収集分野である。地域住民から「共匪」の隠れ家や戦力、出没状況などの情報を引き出し、その情報を基に作戦を立てて敵を追い詰めていくのである。韓国の盧武鉉政権下で発足し、植民地期の対日協力について研究調査を行った「親日反民族行為真相糾明

委員会」により収集された史料集<sup>5</sup>には、1960年に出された間島特設隊に関する延辺朝鮮族自治州公安局の調査結果『위특설부대조직활동(偽特設部隊組織活動)』<sup>6</sup>が収録されているが、本資料によると、間島特設隊内に正式に情報作戦を担当する情報班がつくられたのは1944年の始めであるとなっている(친일반민족행위진상규명위원회 2008:477)。しかし、実際には創設当初から間島特設隊は情報分野において、「匪民分離」工作の役割を担っていた。

満洲国における「匪民分離」工作自体は既に1930年代前半から試みられていたが、間島の朝鮮人「共匪」と地域住民との密接な関係は日本軍にとって悩みの種であった。それは討伐隊に対する住民の協力が得られなかったためであるが、この点を解決すべく間島特設隊は朝鮮人部落へ赴き朝鮮人住民を相手に情報収集を行った。すると、それまで満洲国軍の中国人部隊に非協力的だった住民たちが、徐々に「共匪」に関する情報を提供するようになった(飯倉 2013:126-127)。これは、間島特設隊隊員が間島省生まれの朝鮮人であり朝鮮語を話すということが、住民たちに同胞・同郷意識を抱かせ、討伐隊に対する恐怖心や敵対意識なしに双方のコミュニケーションが円滑に行われるようになったということを意味している。また、隊員たちは地域の事情に通じており、住民の中には隊員の家族や親せき、友人、知り合いなどがいた場合もあっただろうと考えられる。

このようにして間島省一帯での「共匪討伐」は、間島特設隊が得た情報を基に日本、満洲国の軍・警察によって進められ、1941年の春に東北抗日連軍は事実上壊滅状態に追い込まれた。1943年末まで間島省一帯にいた間島特設隊は、1944年の始めから活動拠点を熱河省に移したが、このころに情報班が熱河省榆樹林子で設立された。その目的は、「八路軍、地下工作員、民兵の活動と住民の思想動態を偵察し、特設隊が掃討活動と抗日軍民を逮捕し、虐殺するための情報を提供すること」であった。情報班は部隊内部に情報工作の責任者として軍官1名を置き、3名の満洲国軍憲兵がこれを助

<sup>4</sup> 1937年には満洲国軍政部軍事調査部から、「共匪」の動向を探る目的として『満洲共産匪の研究 第一輯』(極東研究所出版社)が刊行された。

<sup>5</sup> 친일반민족행위진상규명위원회 (2008)。

<sup>6</sup> 延辺朝鮮族自治州公安局 (1960) 『위특설부대조직활동』中共延辺州委5人省組弁公室。



け、工作を展開した。各中隊から 13 名の優秀な隊員を選抜して組織し、投降し転向した者の中からも若干名を吸収し、情報活動を行った。情報班の活動は主に (1) 情報収集、(2) 反共宣伝、(3) 捕虜の尋問である。情報収集の方法として数多くのやり方が挙げられているが、特に注目できるのは、現地の警察や特務機関と連携していた点、転向した者を利用した点 (친일반민족행위진상규명위원회 2008:477-478) である。

活動内容中の反共宣伝がどのように行われていたかはここからは明らかではないが、麗順事件においては韓国軍が現地の警察と連携して協力者搜索を行った。また、朴正熙のような転向した人物を陸軍本部の情報局で利用したのと同様の情報収集方法が、間島特設隊で行われていたことが遡及的に予想できる。1943 年から間島特設隊に配属された白善燁は、中央陸軍訓練処を 1941 年 12 月に卒業し、満洲の東部、宝清に駐屯していた歩兵第二八団 (連隊) に見習士官として勤務した後に佳木斯の新兵訓練所の小隊長を勤め、1943 年 2 月に間島省延吉県明月溝に駐屯していた間島特設隊に転任した。白は間島特設隊について、「ここで初めてゲリラを見、討伐とはどうあるべきかを知ったのであった」 (白善燁 1993:24) と述べ、「共匪討伐」における「匪民分離」工作と地域住民からの情報収集の重要性を強調している (白善燁 2002:216-223)。白は、1948 年の韓国政府樹立後に陸軍本部情報局長に任命された。

このほか、実際の戦闘の際に満洲国軍出身者同士による技術面における信頼関係と、満洲で学んだ中国語という共通言語が作戦の遂行上、有利に働いた。次の引用は白による朝鮮戦争時に関する言及であるが、間島特設隊出身者同士の関係をよく表している。

一九五一年一二月からの智異山討伐作戦を命じられた私は、まず経験豊かなベテランを集め、精強な部隊を使うことを重点に準備をすすめた。(中略) また連隊長の三人であるが、機甲連隊の李龍大佐、第一連隊の朴春植大佐、第二六連隊の李東和大佐はともに間島特設隊の出身で、討伐作戦の豊富な経験をもっていた。私は、この陣容ならばかならず成

功すると確信がもてた (白善燁 2002:223)。

また白は麗順事件当時、金白一と満洲国軍軍医出身の元容徳と電話で作戦の打ち合わせをする際に、誰が盗聴しているか分からないため、三人が満洲で学んだ中国語を共通言語として話をしたと述べている (白善燁 2000:121)<sup>7</sup>。

このように、植民地期の「共匪討伐」経験を持っていた満洲国軍出身者は、植民地期に情報分野を中心に据えた「匪民分離」工作という「共匪討伐」戦術を学んだため、麗順事件の鎮圧に適格でありえた。満洲国軍出身者による麗順事件鎮圧作戦における「活躍」には、日本の植民地支配下での軍事経験が大きく結びついており、彼らにとって「殺さねばならぬ『アカ』」は、麗順事件の処理過程を通して初めて出会った存在というよりは、むしろ植民地期の「殺さねばならぬ『共匪』」の再来として映った。

## おわりに

本書は、これまでほとんど研究されてこなかった李承晩政権の反共国家形成に麗順事件が及ぼした影響として、蜂起が一般大衆によって担われた側面や軍・警察による民間人協力者搜索・虐殺が行われた点を考察し、協力者の搜索・虐殺過程で蜂起に協力的でなかった人々までが「アカ」にされ、その後さまざまな法制的暴力や日常の暮らしに対する統制、宣伝などを通して「殺さねばならぬ『アカ』」がつくられた過程を取り上げた。また、現在まで続く韓国の反共体制における「殺さねばならぬ『アカ』」の起源を考察する視点から、韓国社会に暗い影を落としてきたさまざまな暴力に関して、政府樹立からわずか数ヶ月後の李承晩政府の事件に対する危機対応によって始まったという新しい視点をもたらした。「共産主義者の反乱」という認識を、多様な資料の相互参照による事実の検証を通して解体しただけでなく、そこから一歩踏み込んで、そのような認識が事件後につくられた過程について考察しており、麗順事件についての認識が事件当時の李承晩政府の見解をそのまま

<sup>7</sup> 白は朝鮮戦争中の 1950 年 10 月 25 日には、介入当初の中国軍の捕虜に対して中国語で尋問を行ったという経験についても語っている (白 2002:123)。



引き継いでいるものであるということを解明して  
もいる。本書は、広く読まれるべき一冊である。

【主要参考文献】

<日本語>

- 飯倉江里衣（2013）「1930年代満洲における朝鮮人の抗日／『親日』軍事組織への参入—異なる植民地体験とつくられた敵対関係—」東京外国語大学大学院 2012年度修士論文。
- 板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔編著（2011）『東アジアの記憶の場』河出書房新社。
- 金東椿著、金美恵・崔真碩・崔徳孝・趙慶喜・鄭榮桓訳（2008）『朝鮮戦争の社会史 避難・占領・虐殺』平凡社。
- 佐々木春隆（1976）『朝鮮戦争.韓国篇 上（建軍と戦争の勃発前まで）』原書房。
- 樋口雄一（1967）「麗水・順天蜂起」『朝鮮研究』日本朝鮮研究所。
- 樋口雄一（1976）「麗水・順天における軍隊蜂起と民衆」『海峡』朝鮮問題研究会。
- ブルース・カミングス著、鄭敬模・林哲・山岡由美訳（2012）『朝鮮戦争の起源 2 上』明石書店。
- 白善燁（1993）『対ゲリラ戦 アメリカはなぜ負けたのか』原書房。
- 白善燁（2000）『若き将軍の朝鮮戦争』草思社。
- 白善燁（2002）『指揮官の条件』草思社。
- 満洲国軍刊行委員会編（1970）『満洲国軍』蘭星会。
- 満洲国軍政部軍事調査部編（1969）『満洲共産匪の研究 第一輯』（1937年刊の複製）、極東研究所出版社。

<朝鮮語>

- 김득중（1994）「제헌국회의 구성과정과 성격」成均館大大学院修士論文。
- （2004）「여순사건과 이승만 반공체제의 구축」成均館大大学院博士論文。
- （2009）『‘빨갱이’의 탄생:여순사건과 반공 국가의 형성』선인。
- 金錫範（1987）『満洲國軍誌』（出版地不明）。
- 김주용（2008）「만주지역 간도특설대의 설립과 활동」『韓日關係史研究』第31集，경인문화사。
- 신주백（2002）「満洲国軍 속의 朝鮮人將校와 韓国軍」『역사문제연구』通卷9号，역사비평사。
- 曹健（2009）「일제의 간도성 ‘朝鮮人特設部隊’ 창설과 재만조선인 동원 1938~1943」『한국근현대사연구』第49集，한울。
- （2010）「일제 ‘조선인특설부대’의 활동과 귀환」중국해양대학교 해외한국학 중핵대학사업단編『근대 동아시아인의 이산과 정착』경진。
- 차상훈（1991）「악명높은 간도특설대」『決戰』民族出版社。
- 친일반민족행위진상규명위원회（2008）『친일반민족행위관련 사료집.11, 일제의 해외조선인 통제와 친일협력 1931~1945』친일반민족행위진상규명위원회。
- 친일인명사전편상위원회編（2009）『친일인명사전』1-3卷，민족문제연구소。
- 韓洪九（2001）「大韓民國에 미친 滿洲國의 遺産」『中國史研究』第16集，中國史學會。
- 황남준（1987）「전남지방정치와 여순사건」『해방전후사의 인식』3，한길사。
- （1987）「여순항쟁과 반공곡가의 수립」『연세』第25号，연세편집위원회。

<英語>

- John Merrill（1989）*Korea : the peninsular origins of the war*, University of Delaware Press.